

特許資料から読む 近代日本供養史の一側面

写真入位牌に注目して

The Modern Japanese History of the Necromaterials as Revealed by Patent
File Data : Note the Photo-illustrated Memorial Tablets

土居 浩

DOI Hiroshi

はじめに

- ① 実用新案「写真入位牌」の軌跡
- ② 商工録にみる仏壇仏具業の近代
- ③ 特許資料にみる葬祭具の近代

おわりに

【論文要旨】

近代日本の供養を考察する際、特許資料は有用な情報源である。特許資料からは、どのような技術が葬祭サービスに転用されているのか、読み取れるからである。1910（明治43）年に出願・登録された実用新案の「写真入位牌」を製造販売した金位牌株式会社（1915～1931）について、その時代背景を、大正前期・大正後期・昭和初期それぞれの『大日本商工録』に掲載された業者数から検討した。この時期、仏壇仏具業は府県別の分布に偏りが大きく、その増減も激しい。一方で同時期の葬祭業は、仏壇仏具業に比べると、府県別分布の偏りが小さい。総じて、大正から昭和初期にかけて、仏壇仏具業は各地の地場産業として確立しつつあった。一方、葬儀業は、大都市を抱える府県とその周辺県から、徐々に全国へと浸透した。この時代背景の中で、金位牌株式会社は葬祭業界へ参入したのである。さらに1945年までの特許資料（特許と実用新案）を抽出し概観すると、関東大震災後の特設墓地提案と同時代的発想であることをうかがわせる納骨堂や、戦時下の資材不足に対応する棺など、震災や戦争の影響が反映されていることがわかる。仏壇仏具業界における大正時代のスタートアップ企業である金位牌株式会社は赤坂区青山に所在しており、東京でほかの仏壇仏具業が集住する浅草など下町地区からは離れていた。しかし東京の仏壇仏具を製造する業者の一つとして、金写真位牌株式会社は複数の資料で言及されていたのである。今後は、この小稿で取り上げた金位牌株式会社のように、それぞれの時代ごとに「技術を葬祭のために転用」して新規参集してきた業者にも目を配りつつ、同時代の総体としての葬祭業を把握する方法について議論を重ねることが必要だと思われる。

【キーワード】 近代日本、葬祭業（供養を含む）、位牌、写真、特許資料